

地理A[分析]

第1問は第1日程で新しく出題された「現代社会における地図と地理情報の活用」ではなかった

マーク数の変化はないが、第1問は、共通テスト(第1日程)になって新しく出題された「現代社会における地図と地理情報の活用」ではなく、2020年度センター試験で出題されていた「日本の自然環境と防災」が再び扱われた。

難易度(【第1日程(1月16日・17日)】との比較)

第1日程並み

標準。第1日程と同様、大半が教科書に準拠した問題で構成されており、図表から読み取りやすい問題が多く、判断に悩むものも少なかった。

出題分量(【第1日程(1月16日・17日)】との比較)

マーク数は30で第1日程と同じであった。組合せ解答は16で第1日程と比べると2つ減少した。6択の問題は9問で第1日程よりも1問増加したが、8択問題はなかった。

出題傾向分析(【第1日程(1月16日・17日)】との比較)

大問のテーマは、日本と自然環境と防災、世界の生活文化と多様性、東ヨーロッパとその周辺地域、地球的課題、地域調査の5題で、第1日程と構成的には変化はなかった。

2021年度【第2日程(1月30日・31日)】フレーム

大問	分野	配点	マーク数
第1問	日本の自然環境と防災	20	6
第2問	世界の生活文化と多様性	20	6
第3問	東ヨーロッパとその周辺地域	20	6
第4問	地球的課題	20	6
第5問	福岡市とその周辺の地域調査	20	6
合計		100	30

2021年度【第1日程(1月16日・17日)】フレーム

大問	分野	配点	マーク数
第1問	現代社会における地図と地理情報の活用	20	6
第2問	食文化	20	6
第3問	南アジア	20	6
第4問	世界の結びつきと地球的課題	20	6
第5問	宮津市の地域調査	20	6
合計		100	30

設問別分析

第1問

地形図の読図、日本各地の2018年における暖候期の降水量、気象災害、連続堤と非連続堤(霞堤)の比較、大雨による災害、日本の自然災害と防災が問われた。問4と問5は模式図を用いた出題であった。いずれの問題も、問題の図や文章をよく読むことで正解できる。

第2問

Aの食文化では、主食となる作物、食べ物の調理法と食べ方、米の年間消費量上位国における年間消費量と輸出量、Bの生活文化では、南アメリカ高地の自然環境と生活、世界各地の生活習慣と背景、宗教の視点からみた多文化共生の取組みが問われた。問3は複数の資料を確認する必要がある、①は図1で米を主食としているブラジルやマダガスカルを読み取ることで誤りだとわかる。

第3問

雨温図の判定、3河川沿いの地域で信仰されている宗教の分布、ドナウ川沿いの大型観光船の出発地、EU加盟国の経済格差、ルーマニアの伝統料理、酸性雨の被害とその理由が問われた。問1のAはアルプス山脈に位置しているため気温が低くなることに注意したい。問3の都市Xは、図4に加えて図1も参照して、3つの条件を同時にみたすものを選ぶ必要があり、新しい傾向の問題である。問4はブルガリアとルーマニアがともに旧社会主義国で、2007年にEUに加盟した所得水準の低い国であることを理解している必要がある。問5は、文章全体から歴史的背景を読み取り、トウモロコシとトルコを選びたい。

第4問

国別の化石燃料による発電の割合、地熱発電と風力発電の発電量上位国と各発電形式の課題、食料問題を解決するための取組み、国別の合計特殊出生率と乳児死亡率の推移、発展途上国におけるスラムの発生・拡大のメカニズム、先進国における都市問題とその取組みが問われた。問5で第1日程と同様の形式でメカニズムを模式的に示す問題が出題された。

第5問

景観写真の撮影方向、人口集中地区の分布と福岡市への通勤・通学率、福岡市の産業、都市の景観写真と人口増加率・老年人口増加率、地理院地図の読み取り、福岡市からみた日本の人口移動について出題された。問4の老年人口増加率は、始発駅から最も遠いIではもともと老年人口率が高いため増加率は低くなる。地理B第5問と共通問題

過去平均点の推移

21年度※ 【第1日程】 (1月16日・17日)	20年度	19年度	18年度	17年度
60.0	54.5	57.1	50.0	57.1

※2021年度の平均点は1/22大学入試センター発表の中間集計その2の平均点です。